2024/03/27　　聖書研究会

聖書個所：コリントの信徒への手紙一 5 章 6〜13 節

〇5 章のテーマは教会の戒規。

・当時のコリントの教会では「みだらな行い」（㊀「ポルネイア」〈※「ポルノ」の語源〉）が問題になっていた。コリントの町にはそのアフロディテを祭る神殿に多くの神殿娼婦たちがいて、コリントの人々の性に関する自由な感覚、雰囲気に影響を与えていたようで、「父の妻をわがものとしている」（直訳は「父の妻を所有する」）という事態が具体的に生じていたのである。それは父の後妻か妾と、父の生きている間（普通離婚されていると見る）か、おそらくは死後に、結婚かその他の形で性交渉を持つということだったのだろう。それはユダヤ教の律法でも禁じられており（レビ記 18：7〜8、20：11、申命記 27：20）、ローマにおいても近親相姦に当たるとして禁止されていた。

・さらにコリント教会ではこうした「ポルネイア」の出来事を、自分たちは完全な者とされ、救われたものだから、あらゆる現実から解放され、自由やりたい放題したらよい、そうした放縦が許されると積極的に主張した人々がいるという有り様だった。そのためコリント教会では、ある教会員がそうした悪に加担していることもさることながら、教会内にそうしたことがありつつも、「悲しんで、こんなことをする者を自分たちの間から除外す」ることもせず、平気でいるばかりか、「威張りくさっている」という事態が生じていたのである。

・パウロはコリントの教会の中で起こっていたこうした性的関係におけるルーズさ、無感覚を教会の問題として厳しく断罪する。そして「こんなことをする者を自分たちの間から除外す」る、すなわち除名などによって教会の交わりから断つことを勧告する。

【注解】

〇「あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。」（6 節）

→パウロはこのようにして「ポルネイア」の問題を起こしている人々を「自分たちの間から除外す」ることもせず、「高ぶっている」、威張りくさっているコリント教会の人々の現状を嘆き、パン種の譬えでもって（※「わずかなパン種が練り粉全体を膨らませる」は、当時よく知られたことわざの類いであったと思われる）、小さな（通常悪い）ものが全体

に影響を与える危険、すなわち「ポルネイア」の問題を起こしている人々が教会全体に悪影響を及ぼす危険を警告する。パウロがなぜ教会戒規が必要と訴えるか、それはこうした理由に他ならなかった。

・ユダヤ教においては、過越の前にパン種を家から取り除くという行事が行われていた。このゆえに、ユダヤ人は「パン種」に「不純」という悪いイメージを持っていたようである。

○「いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。」(7 節)

→このようにパウロは「古いパン種をきれいに取り除きなさい」と、過越の祭りの習慣に基づく表現で、教会の中にある回心前の原理や習慣に根差す古い生き方、罪の生き方を捨てるように命じる。それは「新しい練り粉のままでいられるように」、すなわち回心によって与えられた本来の立場、主にある新しい命にふさわしい立場に立って正しい状態に帰るために他ならない。

・「あなたがたはパン種の入っていない者なのです。」

→このようにパウロは過越の祭りを背景とする表現で、キリスト者は古い生き方、罪の生き方を捨てた新しい存在であることを強調する。それはひとえに「キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたから」、そのようにして人々が罪の中から贖い出されたからに他ならない。コリントの信徒への手紙一 1:2 の御言葉を借りて言えば、コリント教会の人々は「至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々」なのであり、この立場を弁えてこの恵みに応えて生きよというのがパウロの一貫した主張なのである。

○「だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いないで、パン種の入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。」(8 節)

・パウロがこの手紙を書いていたのは、ちょうど過越祭の季節だったのだろう。過越祭ではまずパン種が取り除かれてから小羊が屠られる。しかし、コリント教会では既に確かにイエス・キリストという過越の小羊が屠られているにもかかわらず、まだ罪を持った

古い生き方というパン種が取り除かれていない状況だった。そこでパウロはこのような表現で、直ちに恵みに応えよ、不純分子を根絶して福音の基本に立つ教会となれと力強くコリント教会の人々に迫る。

○「わたしは以前手紙で、みだらな者と交際してはいけないと書きましたが、その意味は、この世のみだらな者とか強欲な者、また、人の物を奪う者や偶像を礼拝する者たちと一切つきあってはならない、ということではありません。もし、そうだとしたら、あなたがたは世の中から出て行かねばならないでしょう。」（9～10 節）

・「わたしは以前手紙で、みだらな者と交際してはいけないと書きました」という 9 節の言葉から、パウロがこの手紙以前に書き、現在私たちには伝えられていない手紙があったことが窺える。そこでパウロは「みだらな者と交際してはいけない」と書いたようで、これは教会内のそうした人々と交わりを断てという意味だったのだが、教会外のそうした人、また不品行な人とも一切交わるなという意味に誤解、曲解されて受け取られ、コリントのような町ではそうしたことは現実には不可能なことであるとして無視された、またパウロはそんな非現実的なことを言っていると非難されて評価の低下を招いたと考えられる。パウロはここで「その意味は、この世のみだらな者とか強欲な者、また、人の物を奪う者や偶像を礼拝する者たちと一切つきあってはならない、ということではありません」と、こうした誤解、あるいは曲解を訂正し、自分の真意を明らかにしている。

・パウロは退廃的なコリントの町の状況、またそこで人々がどのような生活を送っていたかをよく知っていた。それゆえコリントのキリスト者がどのような人々と接触しながら生きていかなければならないかを十分理解していたわけである。パウロは決してキリスト者がそうした「世の中から出て行」くように求めてはいない。

○「わたしが書いたのは、兄弟と呼ばれる人で、みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事もするな、ということだったのです。外部の人々を裁くことは、わたしの務めでしょうか。内部の人々をこそ、あなたがたは裁くべきではありませんか。外部の人々は神がお裁きになります。『あなたがたの中から悪い者を除き去りなさい。』」（11～13 節）

・「兄弟と呼ばれる人」、「内部の人々」＝教会内のキリスト者
　「外部の人々」＝教会外の未信者の人々
・パウロが以前手紙で書いたのは、教会内のキリスト者、信者で「みだらな者、強欲な者、偶像を礼拝する者、人を悪く言う者、酒におぼれる者、人の物を奪う者がいれば、つきあうな、そのような人とは一緒に食事もするな、ということだった」。一緒に食事をするということは最も日常的な、しかも初代教会における愛の交わりの具体的な現れだったのであり、それをも禁じるところにパウロの命令の徹底ぶりが窺える。
・この世の人々の間では 11 節に罪表としてリストにされたような行いが問題にならなくても、教会の信者同士の間では神様の恵みに応えて生きる責任が厳しく問われなければならない。そこから大きく逸脱する者の戒規をパウロは以前の手紙で書いたのである。
・しかし、使徒や教会に与えられている裁きの権能は教会内のことに限る。「外部の人々は神がお裁きにな」るのであり、その裁きに任せておけばよい。「内部の人々をこそ、あなたがた(教会員)は裁くべき」なのである。
・「あなたがたの中から悪い者を除き去りなさい」(13 節)は申命記に出てくる戒め(cf. 17 : 7etc.)。パウロはこれを引用することによって、イスラエルの民が偶像礼拝者と姦淫を行う者を取り除くことによって与えられた責任を果たし続けるべきであったように、新しいイスラエルである教会もまた自らに与えられた恵みに対する応答を厳しく求められていることを示す。

〇今回の聖書個所から思うこと
・厳しい裁き、戒規が言われていたが、それは裁きの対象が滅びてしまえというのではなく、あくまでも悔い改めに導かれる恵みの中で行われなければならない。
・今回の聖書個所は、教会の内と外を分け、しかも教会をこの世界から隔離しないパウロの姿勢が窺える箇所だった。私たちも教会内において神様の恵みに応える生き方を妥協することなく追求しつつも、そこで教会を聖域として閉じこもるのではなく、地の塩、世の光として積極的にイエス・キリストの愛と福音とを光り輝かせていくべく関わっていきたいと願う。